

■ 編集だより

編集後記

1月17日で阪神大震災から12年を迎えた。私の住む大阪市内においても、今までに感じたことのない強烈な揺れを体験した。早朝であったが飛び起きテレビのスイッチをつけた。NHK大阪放送局屋上からの映像が映っていたが、特段大きな変化を見つけられず安堵したのもつかの間、神戸放送局からの映像に釘付けになった。なんとあの高速道路が倒壊しているではないか。新幹線のレールが無残な姿を呈しているではないか。途方もないスケールの惨事が発生しているのを実感した。その後の惨状はご記憶のことと思うが、精神科医による「心のケア」の重要性が認識されるようになった。特に神戸大学精神科の安克昌先生の活躍は特筆に値するものであった。まことに残念なことであるが先生は、2000年12月に39歳の若さで他界されたが、震災直後から産経新聞に連載された「心の傷を癒すということ」は単行本にまとめられ、サントリー学術賞を受賞された。先日朝日新聞に安先生の記事が掲載されていた。「心の傷や心のケアという言葉が一人歩きすることによって、『被災者の苦しみ＝カウンセリング』という短絡的な図式がマスコミで見られるようになったと私は思う。その図式だけが残るとしたら、この大災害からわれわれが学んだものはあまりに貧しい」と昨今の「心のケア」「癒し」ブームの危うさを指摘した文章である。さらに「傷ついた人が心を癒すことができる品格のある社会を目指したい」とも述べている。ズッシリと心に響く文章である。

一方、正月過ぎから毎日のように殺人事件が発生している。それも身内の死体を切断するという事件が目立つ。発作的に殺人を犯し、その処理に困り切断するという印象を受ける。残虐性と稚拙さが共存しているようである。この国には殺生を最大の罪とする崇高な倫理観が存在していたのではないのか。いつの間にもこのような荒んだ国に成り果てたのか深い悲しみに包まれている。

精神経誌は精神科医にとって最も権威ある雑誌であり、その時代の要請に応じていく使命を担わされているが、はたして十分にその役割を果たしているのだろうか。答えは残念ながら否といわざるを得ない。道徳観、倫理観の復活を含めた本誌の役割を再認識する必要がある。 木下利彦

次号予告 第109巻第3号

森 隆夫：【巻頭言】精神科医が増えてくれますように

先崎 章：【総説】脳外傷の高次脳機能障害（神経心理学的障害）

大塚公一郎・他：【臨床報告】長期透析経過中に現れた妄想性障害の一例
—身体と語りの取奪と復権要求—

上原久美・他：【会員の声】世界精神医学会 イスタンブール大会に参加して

【第102回総会】

シンポジウム9：労働者のメンタルヘルスの現状と課題（4題）

シンポジウム16：総合病院精神科および大学病院精神科の医療を考える（4題）

笠井清登：【教育講演】精神疾患の脳画像の進歩

深津千賀子：【専門医を目指す人の特別講座】精神科診療のための心理検査